摂食機能療法専門歯科医師 更新審査抄録の作成について

更新審査は、摂食機能療法専門歯科医師としての活動報告とする。

なお、症例報告は不可とする※。

- 1) 臨床指導（所属機関や地域における活動）
- 2) 教育活動（歯科医師、歯科衛生士、他医療職、施設介護職員、学生等対象）
- 3) 研究活動（摂食嚥下障害に関する論文、書籍等）
- 4) 啓発活動（所属機関や地域における活動）

※3) 査読を受けて論文として発行された症例報告に限り、活動内容として認める。

＜原稿記載様式＞

- (1) 文体は常体（である調）でまとめてください。
- (2) 抄録本文は、下記の順に項目を付け記載。

〔研究〕・〔調査〕の発表：【目的】【方法】【結果と考察】

〔症例報告〕の発表：【緒言・目的】【症例および経過】【考察】各項目は【〇〇】で表記し、その後改行してください。改行後は、1字下げたから次の文章を入力してください。

※3) 査読を受けて論文として発行された症例報告は、抄録の末尾に著者名（共著者名も原則としてすべて記載）：表題、雑誌名、巻：ページ、年、の順に記載してください。

例（和文）：武田孝之：同一個人の加齢に伴う咬合面の形態・機能の変化に関する研究，*歯科学報*，84：1535～1562，1984.

例（英文）：Wayler, A. H. and Chauncey, H. H. : Impact of complete dentures and impaired natural dentition on masticatory performance and food choice in healthy aging men, *J. Prosthet. Dent.*, 49 : 427～433, 1983.

＜COI 開示＞

利益相反の有無にかかわらず、抄録の末尾に申告すべき COI 状態を記載してください。

例：（COI 開示：なし）（COI 開示：老年株式会社）

＜ヒトを対象とする医学系研究について＞

倫理審査対象の有無にかかわらず、抄録の末尾に倫理審査の状況を記載してください。

抄録の末尾に所属機関等の倫理委員会（倫理審査委員会）の承認番号を記載してください。

倫理審査対象外の場合はその旨を明記してください。なお、本来ならば倫理審査委員会の承認が必要であるにも関わらず、倫理審査委員会の承認を得ていない場合は、演題を不採択とする場合があります。

例：下記のいずれかを必ず記載すること

(〇〇大学 倫理審査委員会承認番号 9999-22)

(〇〇大学歯学研究科倫理審査委員会より付議不要の返答があった)

(倫理審査対象外)

<<症例報告における患者本人（もしくは代諾者）の同意について>>

症例報告は，抄録内に患者本人の同意を明記してください。患者本人からの同意が得られない場合は，代諾者からの同意を得，その旨を記載してください。

抄録見本

1) 臨床指導（所属機関や地域における活動）

摂食嚥下リハビリテーション学を中心とした歯科医療従事者養成コースの活動報告

【目的】

歯科医療における摂食機能評価や支援の必要性は高まっており、摂食嚥下リハビリテーションが行える歯科医療従事者を養成することは地域医療の推進においても重要と考えられる。地域歯科医師会や歯科診療所と連携して摂食嚥下リハビリテーションを行える歯科医師、歯科衛生士の養成コースを実施したので報告する。

【方法】

〇〇県、〇〇県、〇〇県、〇〇県の歯科診療所に勤務する歯科医師、歯科衛生士を対象として、6回の講義および実習による研修会を実施した。2019年に開催した養成コースでは、①解剖・生理学、②摂食嚥下機能の正常像、③摂食機能の異常所見、④スクリーニング検査実習、⑤栄養状態、⑥嚥下内視鏡検査実習を月に1回のペースで行った。新型コロナウイルスの感染が拡大した2020年以降はオンラインによる講演会や参加人数を10名以下に限定した実習を中心として開催した。2022年からは対面による講義および実習を一部再開させるとともに、養成コースの内容を拡大し、12回の講義・実習とした。歯科医師には別途3回の嚥下内視鏡検査実習と5回の嚥下内視鏡検査実施（患者を対象とした診療）を実施または予定している。また、養成コースをすべて受講した参加者には日本摂食嚥下リハビリテーション学会 eラーニングの内容に準拠した確認試験を実施する予定である。

【結果と考察】

2019年7月から〇〇県で開催した養成コースでは、26名の歯科医師と9名の歯科衛生士が参加した。また、〇〇県で開催した養成コースでは、8名の歯科医師と23名の歯科衛生士が参加した。このうち、〇〇県では4名、〇〇県では8名の歯科医師が嚥下内視鏡検査実習に参加し、うち5名がそれぞれの歯科診療所で嚥下内視鏡検査を含めた摂食嚥下リハビリテーションを診療に取り入れた。2022年からの養成コースには60名以上の参加希望があったため、30名に制限して養成コースを実施している。現在は基本講義として「解剖・生理学」「摂食嚥下の正常・障害像」「摂食機能検査の適応」「栄養評価と食内容」をオンライン形式で実施し、8回の実習を実施する予定である。また、2023年後半にも同様の養成コースを実施し、参加できなかった希望者に対して研修を行う予定である。

（COI開示：なし）

（倫理審査対象外）

抄録見本

2) 教育活動（歯科医師、歯科衛生士、他医療職、施設介護職員、学生等対象）

歯学部およびリハビリテーション科学部教員としておこなった摂食機能療法専門歯科医師の専門性に基づいた教育活動についての報告

【目的】

2018年から2023年上半期までの摂食機能療法専門歯科医師としての専門性を活かした教育面での活動を報告する。

【方法】

前任校において、歯学部学生に対し摂食嚥下リハビリテーションに関する講義・実習を、高齢者歯科学の科目内およびポリクリ実習（相互実習およびシミュレーター実習）として実施した。特徴的な教育としては、舌接触補助床（Palatal Augmentation Prosthesis; PAP）体験実習を独自の方法でおこなった。PAPの適応症である舌機能障害を理解するために、健常者が舌機能障害を体験できるマウスピース（Mouthpiece as Impairment Simulator for Lingual Action; MISLA）を作製・装着させ、舌機能障害の不便さ（口腔期障害・構音障害）を体感させた。その上で口蓋床を用いてPAPの作成過程で重要な舌の機能印象をおこなわせた。

【結果と考察】

このMISLAおよび口蓋床を用いたPAP実習プログラムは、学生（170名）だけでなく歯科医師（51名）に対しても実施した。実習後のアンケートでは「PAPの適応症が理解できた」「患者の気持ちがわかった」といった感想が得られた。臨床教育としては、前任校の附属病院に嚥下造影検査・嚥下内視鏡検査装置を備えた『摂食嚥下外来』を新設し、研修医や大学院生に対して指導をおこなった。地域での教育活動としては、〇〇県摂食嚥下リハビリテーション研究会に世話人として所属し、地域で多職種向けの勉強会を実施した。

2021年に現在の所属大学リハビリテーション科学部言語聴覚療法学科に赴任し、言語聴覚療法学科学生に対する『摂食嚥下障害学』の講義・実習を担当した。コロナ禍のため、地域での教育活動には制限があったが、多職種向けの勉強会（参加者888名）や言語聴覚士対象、歯科衛生士対象のセミナーをオンラインやハイブリッド方式で実施した。2023年4月に同大学歯学部へ異動し、『摂食機能療法学分野』が新設され、そこに赴任し教育活動を継続する予定である。

（COI開示：なし）

（倫理審査対象外）

抄録見本

3) 研究活動（摂食嚥下障害に関する論文、書籍等）

舌部分切除患者の心理面の変遷に関する質的研究—M-GTA 分析による—

【目的】

舌癌の舌部分切除では比較的機能障害の程度は軽いと報告されているが、社会復帰に必要な心理面のサポートを必要とするケースが多い。本研究では、舌部分切除患者の心理面をサポートするための新たな治療方法を開発するための基礎研究として、術前から術後の機能面の変化と心理面の変遷を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は20XX年X月～20XX年X月の間に、舌癌初発により〇〇大学歯学部付属病院に入院し、舌部分切除術を受けた患者18名（平均年齢67.9±12.8歳、男性5名、女性3名）であり、術前・術直後・術後3カ月・術後6カ月の4回インタビューを行った。インタビューは対象者の回答次第で内容を深く掘り下げることが可能となる半構造化面接を採用した。分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）を採用した。

【結果と考察】

インタビューデータから分析した結果、1572個の生データが抽出され、これをもとに下位概念を生成し、関連しあった概念のまとまりをカテゴリーとした。最終的に①不安の変遷、②機能回復と心理支援、③精神的健康の獲得 の3つのコアカテゴリーが生成され、全体像を示した総合結果図を作成した。患者の癌の予後や転移・再発に対する不安や、術後の生活に適応するための心理的変容が明確になった。当科は日常生活における患者の訴えを聴取しやすい環境にあり、必然的に歯科医師が患者の心理的支援をする役割を担っている。この患者の心理面の変遷を理解し、患者に関わるその他の専門医と情報共有することで、患者に有意義な治療を提供することが出来ると考えられる。

（COI 開示：なし）

（〇〇大学 倫理審査委員会承認番号 9999-22）

抄録見本

4) 啓発活動（所属機関や地域における活動）

〇〇県高度・専門医療人材養成支援事業の展開 ～ 摂食嚥下に関する教育活動の3年間

【目的】

摂食嚥下機能に問題を抱える人を地域でサポートするためには、病院だけでなく地域の医療および介護従事者が関連する知識を共有し、基本的手技を習得する必要がある。〇〇県では、高度・専門医療人材の養成・確保を目的に、研究会等のグループが行う活動に対して補助対象事業を募っている。演者は、2019年より本制度を利用して県内の摂食嚥下診療と食支援に従事する医療・介護従事者を対象に、その知識と技能の教育・啓発を行っている。今回、その概要と業績について報告する。

【方法】

演者が代表を務める「食力の会」の発展事業として、摂食嚥下診療と食支援に特化した高度・専門医療人材養成支援事業の3年間を振り返り、これまでの業績について集計した。

【結果と考察】

2011年に演者の企画で発足した「食力の会」は、能登地域の歯科医師・歯科衛生士・管理栄養士・言語聴覚士・看護師・介護士ら約40名で構成され、これまで、近隣の病院や施設で提供されている食形態の相違を整合するために「食形態マップ」を作成するなど、病院や施設間のシームレスな食支援の連携をめざして取り組んできた。やがて、〇〇地域に留まらず、県内全域に「食力の会」の取り組みが浸透するとともに2019年より〇〇県の助成事業として認可された。同時に、事業体制も〇〇県歯科医師会が共同となることで、歯科医師や歯科衛生士の参加が増え、歯科医療従事者に対する摂食嚥下診療と食支援に関する教育も行っている。臨床経験や職種によって食べることに対する知識や考え方、方針は様々であるため、事業の方向性を逸脱しないために教育研修シラバスを作成した。シラバスは、基礎編と応用編を併せて全20章から成り、研修開催毎に確認テストを実施し、段階的に学習するプログラムとなっている。基礎編は、①老化について、②高齢者の特徴、③バイタルサインの読み方、④血液データの読み方、⑤栄養の評価、⑥摂食嚥下障害概論、⑦解剖と生理、⑧薬剤の知識、⑨疾患別にみる摂食嚥下障害、⑩食支援の10章で構成される。一方、応用編は、⑪問診のポイント、⑫身体・神経学的所見、⑬胸部・頸部聴診、⑭嚥下スクリーニングテスト、⑮嚥下内視鏡検査、⑯嚥下造影検査、⑰間接訓練と直接訓練、⑱食事場面の観察ポイント、⑲食事介助と支援の在り方、⑳症例検討の10章で構成される。さらに、歯科医師に限るが、これら全過程を修了するとVE実技研修を受講する流れとなっている。2019年より開始した本事業は4年目を迎え、年間約100人が受講している。また、VE実技研修を受講する歯科医師数も増加しており、年間約20人が終了し、継続参加希望者も多く、今後も継続して、〇〇県の摂食嚥下診療と食支援の基盤として地域の専門職連携の充実と住民の摂食嚥下障害をサポートしたいと考える。

(COI 開示：なし)

(倫理審査対象外)